



京都大学 総合人間学部 広報

特集 研究・教育活動紹介

哲学のふるさと	安部 浩	2
今の記憶	戸田 剛文	4
人はなぜ外国語を学ぶか	西山 教行	6
「わたしのもの」という問い	松村圭一郎	8
私の興味 — 物性物理学 —	伊藤 哲明	10

同窓会事務局からのご挨拶と新歓合宿のご報告

.....	安部 浩	12
-------	------------	----

新任教員より

「自己紹介」をめぐって	鶴飼 大介	16
新任の御挨拶	見平 典	17
「自由の学風」の中で	小木曾 哲	18
新任のご挨拶	小西 隆士	19

特集 研究・教育活動紹介

哲学のふるさと

安部 浩（人間科学系）



教師 久しぶりやなあ。こんな処でばったり会うとは…。どこへ行くところ？ ほんでどこから来たの？

学生 こちらこそ御無沙汰しております。実は昨日、友達家で一晩中お酒を飲みながら色々話していたんです。これから下宿に戻って一眠りするつもりなんですけど、たまには川沿いに歩いて帰ろっかなあって思い立って、散歩してたところです。

教師 ほお、徹夜で痛飲して散歩とは…。元気やねえ、若者は。それで立ち入ったことを伺うようで悪いけど、夜通し何の話をしていたの？

学生 本当に色んなことです…。まあ先生にも関係することでしたら、専攻をどうするかといった話もしたりしましたけど。

教師 そう言えば前に来てくれたとき、あなたは哲学するか、せえへんかでえらい迷ったね。でどう？ その後どうするか決まった？

学生 先生には何度か相談に乗って頂いたのに、本当に申し訳ないのですが…。今のところ、哲学をするのはやっぱりやめとこうかなと思います。

教師 そうか…。まあ、それもええんちゃうかなあ。人間、哲学なんかせえへんでも、生きていくのに何も困らへんしね。

学生 そこなんです、先生。それなら哲学をすることには一体全体、何の意味があるんですか。わ

たし、これまでも一応、哲学の入門書をいくつか読んでみたんですけど、自分の疑問にきちんと答えてくれる本には残念ながら出会えませんでした。みんな「てつがくはべつにむずかしくないからね、ちっともこわがらなくていいんだよ、てつがくすることって、すっごくふつうのことなんだもん」みたいなノリで…。でも逆にその胡散臭い猫なで声が完全にイッチャッテヤバイ感じで、絶対フツーじゃないっていうか…。とにかくわたしの問題意識は初めから封じられていたんです。でもそんな中、先生から教わって読んだプラトンの対話篇だけは違ってました。だってプラトンは、登場人物の一人にソクラテスへ反論させてますよね。哲学は若いうちにちょっと囁る分にはいいけれども、その後もずっと続けると人間はかえってまともさを失い、スポイルされちゃうんだって…。わたし、正直に申しまして、哲学をすることが怖いんです。

教師 なるほど、よく解るなあ。私にとってもね、哲学は本質的に非日常的で異常なものだから…。ただあなたと私の違いは、私自身は、我々を取り巻くこの何気ない日常の世界こそが、むしろ謎に満ちた不気味なものだと考える点かな。さて、あなたの先程の間にはどうお答えしたもんだらう。例えば私自身がなんで哲学なんかしてるのかを説明したら、それで許してもらえるんやろか。

* * * * *

「哲学は本来、郷愁である」（ノヴァーリス）は、私が予てから好む言である。では思索の最中、私

が「遠きにありて思ふもの」であるところの、ふるさととは何か。

このふるさとは、郷愁（すなわち哲学）を喚起する当のものとして、そもそも我々をして思索へと赴かしめる最も原初的な契機でもある。嘗てプラトンはこれを名付くるに「驚き」を以てし、西田幾多郎はそれを「悲哀」と表現した。

私は、この哲学のふるさとを「さびしさ」と呼んでみたい。

さびしさは、何の前触れもなく、何故とも知れず、不意に私を訪れる。その時私は、これまで何気なしに自明視してきた周りの人や物と自分自身との間に、ふと名状し難い距離を感じる。その時、周囲は先刻と同様、何一つとして変わっていないようでもあり、一切のものは—まるで予め默契を交わし合っていたかのように—突如として一斉に装いを改めたふうでもある。だがここで、あらゆるものが異形の相を帯びると言っても、それらは、サルトルの描写するが如き、我々の嘔吐を誘う「恐ろしい、淫猥な裸形の塊」に変ずるわけではない。却ってその時、ものは皆悉く、己が確固たる存在を誇示する活物としての自らの有り様を、幽けき、夢幻なる静物としてのそれへと密やかに転じたのである。

とはいえ、さびしさとは、私を取り巻くものが示す、このような侘びしき佇まいに尽きるものではない。寧ろそれは、かかる寂寞たる姿を呈する人や物と共に今やそれとして姿を現すに至った—何処よりか絶えずひたひたと私に迫り来るところの—どこまでも果てしのない、静かな気配を指すのである。

この凛々たる気配が辺りを支配する中で、私は今更ながら瞠目しつつ、改めて人や物と出会う。否、より正確に言えば、私と周辺のことを包んでいるそうした気配、すなわちさびしさこそが、この出会いの場として、私ともの両者をして新た

に邂逅せしめるのである。それではさびしさは、何故にかような遭遇を可能にしうるのであるか。

それは、さびしさが本質的に「はれ」であるからである。「はれ」という言葉は、例えば雨や雪が上がること（「晴れ」）、或いは雲散じ、霧消ゆるさま（「霽（は）れ」）の謂である。そしてこの語はまた、「墾（は）る」（障害物を除去して土地を開拓すること）や、「原」（見通しの良い、広やかな処）に通じると言う。つまり、〈はれ〉とは、余計な夾雑物を取り除ける「晴らす」働きを通して開かれた、或る広やかな場なのである。そしてさびしさ（〈はれ〉）はこうした開けたる処として、私ともの双方に邂逅の舞台を提供しうるのである。

しかしながら、この新たな出会いに端を発して、私とものとの普段通りの交流が再び開始されるや否や、〈はれ〉なる場は、日常生活という茶番狂言において銘々の役柄を演ずべく犇めき合う存在者によって塞がれるに至る。「さびしさ」とは実のところ、かくして本来の面目を失い、「荒（さ）びて」しまっている〈はれ〉の自己表現である。別言すれば、哲学の「ふるさと」であるさびしさは今や、打ち捨てられて最早誰も顧みることのない「古里」に成り果てているのである。

さびしさが私を訪れ、私を思索に赴かせるのは、まさにこの時である。〈はれ〉の場を占拠する様々なものが淡き幻の如きものとして背景へと追いやられ、この場それ自体が真に開けたる処として前景に現れうる為には、さびしさは私の思索の「晴らす」働きを必要とするのである。

（あべ ひろし）

今の記憶

戸田 剛文（人間科学系）



もともと、別にこのような文章を書くことはそれほど苦痛ではないし、論文を書くことに比べたらむしろ楽しいことであるのだけれど、さすがに今回、この文章の依頼が来たときには、げんなりした。というのも、自分の研究の紹介をする文章を、すでに6月に二つ書き終えたところで、そのときも、その二つの内容を差別化するのに苦慮して、なんとかできたと思ったところでこのとどめの依頼だったからだ。（もちろん、誰も悪くないのだが。）でも、大学の教員である以上、自分が何をやっているかということを知ってもらうことは必要だし、いい機会を与えてもらっているのも事実だ。ただこういうことを書いたのは、多少は他で書いたものとかぶってしまうということに対する言い訳をしておきたいからだ。

僕は哲学の研究に携わっている。そして、総合人間学部の出身である。「そして」とつなぐのには理由がある。人に哲学をしていますというと、哲学ってどういうことをするんですかとよく聞かれる。そしてそのたびに少し考える。また総合人間学部出身ですと言うと、総合人間学部ってどんなことするんですかとよく聞かれる。そしてそのたびに少し考える。つまり、総合人間学部というところで哲学をやっていますと人に言うと、その両方についてそれがどんなものかを聞かれてしまう。そして、そのたびにとても考える。このよう

に、わりとよく、自分がやっていること、自分がいるところについて考えさせられてきたのだ。今振り返ってみれば、いつも同じ説明をしてきたわけではない。いろいろ考えたり、勉強したりしていく中で、つねに僕の答えは少しずつ変化している。ただ、哲学をやっていてずっと思っていることがひとつあって、それは哲学とは役に立つものだ、ということだ。

今の僕の考えでは、哲学の効果は、問題を解くということよりも、問題を生み出すことにある。その対象となるものは、身近なものからもっと社会的なことまでいろいろだ。たとえば、とても身近なものに「色」というものがある。僕らは色が何かということをととてもあたりまえのように知っていると思っている（かもしれない）。目の前のビリヤードの手玉が白いと思うとき、その玉のもつ白さは、玉の上の、ある一定の広がりをもつものだと思う（かもしれない）。でも、照明が変化すれば、それは変化する。でも僕らは玉の色が変わったとは思わない。黄色い照明下で手玉が黄色く見えても、手玉の本当の色は白いと思っている（かもしれない）。では、手玉の白さというのは何だろうか？ また、手玉も、他のものと同じように原子からできているのだろうけれど、その原子が白いわけではない。光が当たって僕らの感覚器官を刺激して、手玉を占める白さが見える。でも頭の中にその白さがあるわけではない。では、その白い広がりはどこにあるのか？

またニュースで殺人事件を見たときに、犯人の責任能力についてよく言及されるが、人の責任能

力とは何だろうかとか、そういった責任の根拠となる自由さとは何だろうかとか、考えてみれば、いろんな問題があって、なんとなくわかっているようで、実はよくわからないものがたくさんある。要するに、今の僕にとっての哲学の役割とは、まずそういった僕らが生きている世界にあることからの問題に対する考え方を、できるだけたくさん出していくということだ。

そして、こういった多様な物事の捉え方を、誰に提示するのか？ 専門家であろうとなかろうとできるだけ多くの人がいい。専門家の中でしかなかなか通用しない学問分野もたくさんあるだろうし、哲学研究の中でも、文献研究などはその部類にはいるが、そうではない（というよりはそうであってはならない）領域もたくさんあると思う。そういった領域にもチャレンジしていきたいと思っている。ソクラテスは、当時の知識人とも多くの話をしたが、多くの若者とも話をした。知識人との対話の方が、若者との対話よりも評価されるべきだなどということはないだろう。しかも、なんだか専門家じゃない人たちとの対話のほうがよっぽど楽しそうだ。できるだけたくさんの人に、あたりまえだと思っていたことにもいろんな考え方があることを提示し、それについてみんなで考え、話し合えるような土壌を作ることに少しでも貢献できたらと思う。そうすることによって、さまざまな立場や観点が違う人とともに、社会や文化を成熟させていくことに役立てられるのではないかと考えている。

では、こういったことをどれだけやっているのかと言われたら、正直言ってほとんどやっていない。数年前まで学生だった僕は、歴史的な哲学者のテキストを読み、再構成し、自分なりに解釈していくことで精一杯だった。論文を書くにしても、わかりやすく書こうと努力はしたが、あくまでも、いい評価をえるためにやっていたのであり、読み

手への配慮という考えはそれほどなかったように思う。だから、さっき言ったように、あくまでも「今」の僕の哲学観だというわけだ。

ただ、わかっておいてほしいのは、以前と今で、僕の哲学に対する考えが大きく変わったというわけではない。今のような哲学観は、あくまでも、学生のころからこれまでやってきた過去の哲学者の思想に取り組みという作業の中から出てきたということだ。僕自身、今言ったような、あまり疑問に思っていなかった多くのことに、それ自体多くの問題があることに、やはり過去の哲学者の思想を通じて、気づかされ、考えさせられてきたからである。そういう意味で、僕は学生のときから、哲学は役に立つものだと思っていたのだ。ただ、そういったことが社会においていかに役立つのかとか、どのようにしてそれを敷衍していくのかということには思い至らなかった。

これからどれだけ実行できるかわからないのだが、こういったことを書いたのは、せっかく与えられた機会なので、将来、もしこの文章がまた自分の目に触れたときに、ああ、あのとき自分はこんなことを考えていたのかと思える覚書かねて書かせてもらった。将来はまた違うことを考えているかもしれないし、あんまり変わっていないかもしれない。とりあえず、未来の自分が過去を振り返ったときの、今の記憶として。

(とだ たけふみ)

人はなぜ外国語を学ぶか

西山 教行（認知情報学系）



人はなぜ外国語を学ぶのだろうか。人は社会化の第一歩として身につける母語のみで暮らすことができないものだろうか。世界を見回すならば、単一言語

の世界に閉ざされている人々も確かに存在する。しかしそれと同じくらいの割合で、あるいはそれ以上に複数の言語世界に暮らす人々もいる。

人が初めて身につける母語は「母のことば」とも「母なることば」とも考えられるが、それは実際のところ、「母のことば」であるとは限らず、「父のことば」であることや、またいずれのことばではない場合もある。さらに母語は一つとは限らない。二つ、さらに三つのことばを身につけて育つこともある。とはいえ、人が母語を身につけるとき、選択の余地はほとんどない。ところが、外国語、正確にいえば異言語を学ぶときには、何語を学ぶのか、なぜ学ぶのか、何を目的として学ぶのかなど、さまざまな問いを投げかけることができるし、それらの問いを無視することはできない。日本は英語以外の言語学習が中等教育段階においてほとんど確保されていない、世界でも稀有な国であるために、子どもたちや親は言語選択という問題に心を悩ませることが少ない。そのため、はじめて外国語を選択するという経験は、多くの場合、大学入学時となるのだが、近年は英語以外の、いわゆる第2外国語を必修科目として課さない大学や、さらにその選択肢まで奪ってしまった

大学が増えているために、日本人が主体的に外国語を選択する機会はますます減りつつある。

日本社会にあって、外国語、とりわけ英語を学ぶ動機や目的はあまりにも自明に映るためか、これは私たちの意識にあまりのぼらない。とはいえ、初等教育段階から国民全員が英語のみを今後10年近くの間学ぶ意義や、その費用対効果がどのくらいあるのか否かはあまり、論じられていない。言語教育や学習はその効果が社会的に実証されるまで相当の時間を必要とするために、長期的戦略が求められるのだが、現代日本社会の多くの領域で長期的戦略を練り上げる文化は依然として創られていない。それよりも私たちの関心の大半は、英語をどのように学ぶかといった学習法や教授法に向かってしまう。このような思考回路では、英語が入試全般に組み込まれているという現実が、学習の主要な原因になる。そしてひとたび大学に入学すれば、卒業単位に編入されているから必要だ、さらに社会人となれば、昇進のために必要だなど、私たちは何らかの社会装置のために外国語学習を意義づける。

大学のカリキュラムに外国語教育、とりわけ英語教育が統合されているのは、学生が国際人となる上で英語が必要であるとカリキュラム策定者が漠然と考えているからではなく、大学という社会制度の再生産を狙うだけでもない。本学のような研究型大学は、外国語を専門的学術知識の獲得に必要な道具と位置づけていることから、外国語の学習を不可欠と考えて、必修科目とする。ただし、英語があらゆる学術に万能の特効薬だと思っ

ならない。それぞれの学問には成立の歴史があり、特定の言語文化から生まれ、その環境に育まれたものも少なくない。言語文化という環境は学術文化に何らかの影響を及ぼす。数学者のカルノはフランス語で、植物学者のメンデルはドイツ語で、電気学者のマルコーニはイタリア語で思考を究め、独創性を発揮し、学芸の発展に寄与した。単一言語による思考のみが世界を席卷してきたわけではない。

外国語の能力は研究だけではなく、職域に応じて必要となることもある。日本では、幸いなことか不幸なことか、外国語の能力を不可欠とする職業はきわめて少ない。かえって具体的ニーズが曖昧であるからこそ、日本人は好んで外国語を学び、外国語を使用する職業に従事したいとあこがれるのだが、その一方には暮らしのためにやむを得ず、異言語を身につける人々もいる。かつて植民地支配に定められたがために、旧宗主国の言語を独立後も公用語とせざるを得ない国では、異言語能力が社会的上昇に不可分となっている。「移民庁」の設置が政治日程に上りつつある日本社会において、日本語という異言語を私たちはどのように構想することができるのだろうか。移民の優れた日本語能力に出会ったからといって、手放しで喜んでよいものだろうか。そこには思いがけないドラマや葛藤が秘められていることを忘れてはならないだろう。

とはいえ、外国語学習を社会制度や必要性の中だけにのみ、閉ざしてはならない。母語以外の言語を学ぶことは何よりもみずからの人間性をひらく営為であり、異なる言語文化に身を置くことは「自分とは何であり何でないかを感じる」(セガレン『〈エクゾティスム〉に関する試論』) 最良の教育となる。フランス人作家セガレンは異文化との相克の中に「フランスなるもの」の解体と脱出をくわだて、これにより異言語学習の極北を示し、他

者の中に「永久に理解不可能なものがある」と断言する。またフランス共和国の元首相ドヴィルパンが他者性への扉としての多言語主義を訴え、他文化への渡し守となる言語の価値を唱えたのも記憶に新しい。

私の関わる外国語教育学や言語政策といった新興の学問分野は、社会の中で言語がどのような役割を果たすものか、社会は言語にどのように働きかけるか、また言語は社会にどのような作用をもたらすのかなど、マクロの視座から言語と社会の関係を追究する領域といえる。外国語教育には、個人の内部で学習がどのように形成されるのか、教室でどのように学習するのかといったミクロレベルの問題意識だけではなく、学校や社会、あるいは世界の中で言語とどのように関わるのかといったマクロの課題もある。

これは、20世紀後半に生まれた、構築途上の分野であり、実践との協働が欠かせない、ダイナミックな領域であると確信している。

(にしやま のりゆき)

「わたしのもの」という問い

松村圭一郎（文化環境学系）



私はエチオピアの農村部を対象に「所有と分配」というテーマで研究を行ってきた。この「所有」という問いを考えはじめたのは、ささいな出来事がきっかけだった。

最初にエチオピアの村に入ったとき、私は村の中央を走る道沿いの長屋を間借りして生活をはじめた。あるとき、長屋の大家が古ぼけたテープレコーダーを手に部屋に入ってきた。間借りした部屋と大家の部屋とは裏の物置のようなところでつながっており、彼はいつもふらりと部屋に入ってきた。

大家はカセットを入れる部分がむき出しになった壊れかけのテープレコーダーを机の上におくと、「日本の音楽でも聴いたらいい」という。急にどうしたのかと、いぶかしく思っていると、彼は机の上においてあった私の短波ラジオを手にとり、「いいラジオだよな」といって、そのまま何やらつぶやきながら自分の部屋に持って行ってしまった。

一瞬、何が起きたのかわからなかった。たしかに彼は「貸してくれ」とも、「ちょっと聴かせてくれ」とも言わずに、私のラジオを自分の部屋に持ち帰った。テープレコーダーを代わりにもってきてくれたのだから、と自分を納得させようとしたが、彼の行動への違和感をどうしても拭い去ることができなかった。

そして、その後、彼がそのラジオを自分の職場であるコーヒー農園に持っていったことを知って、さらに違和感は大きくなった。せめて自分がいるこの長屋のなかで聴くのならいい。それが私の目の届かない場所にもっていくとはどういうことだ。ほとんど怒りに近い感情を覚えた。「わたしのもの」なのだから、私の許可をえてから使うのが当然だ。そんな気持ちが渦巻いていた。

よっぽど大音量で聴きつづけていたのか、結局、ラジオは2、3日で電池切れになって戻ってきた。私はすぐにラジオを自分のザックのなかにしまいこんだ。

「わたしのもの」がまるで私のものではないかのように扱われてしまう。「わたしのもの」をめぐる感覚が、エチオピア人と私とでは違うのだろうか。もしかしたら、自分の認識のほうがおかしいのかもしれない。ひとり悩む日々がつづいた。それは、「わたしのもの」という感覚がゆらいでしまうような経験だった。これまでのエチオピアの農村部での調査は、ある意味、あのときの「違和感」や「ずれ」に自分なりに答えを出そうと考えつづけてきた過程でもあった。

この「わたしのもの」という問いかけは、いまの世界を見渡してみると、重大な問題につながっていることがわかる。2006年12月、国連大学の世界開発経済研究所がこんな調査結果を発表した。「世界の成人人口の2%の富裕層が、世界の富の五割以上を保有している。（中略）2000年現在、成人人口の1%の豊かな者で、世界の富の40%を保有し、10%ですべての富の85%を保有して

いる。逆に、成人人口の貧しい半数で、世界の富の1%を分け合っている」。

長い歴史のなかで、ひとは「わたしのもの」という寓話をくり返し語りつづけてきた。この土地はわたしのもの、川から向こうは彼らのもの、彼らを打ち負かせば、それは自分たちのものになる。最初は誰のものでもなかった土地を、そしてそこから生み出される富を「誰かのもの」にしてきた。そして今、みんなが自分のものだといって手にしているものを目のあたりにして、愕然としている。なぜ世界の1割の人間で全世界の85%の富を独占するようになったのか。どうしてそれが正当なものとして認められているのか。誰にもわからなくなっている。

「所有」が問題となるのは、土地や資本のようなわかりやすい「富」だけではない。とくに科学技術の発達やグローバル化の進展は、これまでけっして問題にならなかったような「所有」の問いをわれわれに突きつけている。

それは、知的財産であり、身体あるいは命の所有という問いである。デジタル化された音楽や映像は、インターネット上で簡単にコピーされ、世界中に拡散する。著作者の所有権はどこまで認められるのか。そもそもそれをどれほど強制することができるのか。エイズ治療薬を開発した製薬会社は、その薬の生み出す利益と製造方法への排他的な権利をどの程度まで認められるべきなのか。安価なコピー薬をつくることは、その権利を侵害する不法行為なのだろうか。自分の臓器を他人に売却したり、あるいは購入したりするという行為は、倫理的に認められることなのか。国内では禁止されている臓器売買を日本人が海外で行っている現実に、どう向き合えばよいのか。

現在、われわれは、こうしたさまざまな「所有」をめぐる問いを考えなければならない時代に生きている。なかでも、「わたしのもの」を最大限に

個人に帰属するものとして扱う「私的所有」という原則については、学問の垣根を越えた大きな問いになっている。「わたし」は、「わたしのもの」に対する排他的な決定権をもつ。この私的所有権は、多くの社会で基本的な自由を守るための権利として受け入れられている。ただ、私的所有という概念が、さまざまな新しい「所有」をめぐる問いに対して、どれほど有効で、そして、はたして正当なものなのか、答えはでていない。

「わたしのもの」をめぐる問いかけは、社会のあり方そのものを考え直す問いでもある。「わたしのもの」は、いったい誰のものなのだろうか？それは、どこまで「わたしのもの」でありうるのだろうか？エチオピアの農村社会のミクロな事例から考えてきた「所有」という問いかけをとおして、いずれは世界的な富の分配や身体をめぐる所有の問題についても考えていきたいと思っている。

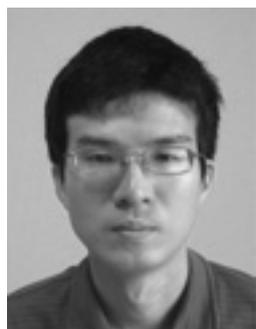
(まつむら けいいちろう)



エチオピア西南部農村（2007年10月）：トウモロコシの収穫後、地主と小作の取り分を分けて袋につめたあと、ロバの背にのせて家まで運ぶ。このあと、親族や村の貧しい者など多様な相手に収穫物が分配されていく。

私の興味 ― 物性物理学 ―

伊藤 哲明（自然科学系）



私の専門は物性物理学です。物性物理学とは言葉のとおり、物質の性質を物理的に理解しようという学問体系です。例えば皆さんが身の回りを見渡したときに、たくさんの物質が目に入ると思います。その中で、あるものは電気を流す金属であったり、あるものは絶縁体であったりします。このような性質の違いはどこから生じるのでしょうか？ このような問いに対する答えを求めるのが、物性物理学です。物質は人類が生活する上で欠かせないものであり、古代より多くの科学者・哲学者たちが、このような物質の性質の問題について考えをめぐらしてきました。しかしながら、本当の意味でこれらの問題に解答が与えられ始めたのは、20世紀の半ばからです。このことは、物質はミクロな素粒子からなっており、物質の性質を理解するためには、物質中のミクロな粒子（特に電子）の振る舞いを理解しなければいけない、ということが必要であったためです。20世紀前半にこのミクロな粒子世界の物理法則（量子力学という名前が付いています。）が作られ、ようやく物質の性質を考察する基礎が出来上がりました。（ちなみにほぼ同時期に、高エネルギー世界の理論体系、すなわち相対性理論という理論体系も作られました。この量子力学と相対性理論は、従来の古典物理の考え方を大きく転換させた2大理論です。）

従来の古典物理学では基礎方程式はニュートン

方程式だったわけですが、このミクロな世界の基礎方程式はシュレディンガー方程式というものになります。このシュレディンガー方程式を、物質中の電子に適用してやり、その方程式を解いてやれば物質の性質は完全に理解できる、ということになったわけです。この物質中シュレディンガー方程式の解の性質を議論したのが、ノーベル賞受賞者のブロッホ（Felix Bloch）という人で、その議論を基礎にした体系にはバンド理論という名前が付いています。先ほど述べた問題、どういう場合に金属あるいは絶縁体になるか、あるいはそれ以外でもほとんど全ての身の回りの物質の性質は（例えば、なぜ金属はピカピカ光っているかとか、絶縁体に比べて金属は触るとなぜ冷たく感じるのかなど）、このバンド理論から理解することが出来ます。現代のテクノロジーを支える花形産業の半導体の特性も、このバンド理論が基礎になっています。古代からの疑問に回答を与え、産業の大きな発展をもたらしたという点で、この理論はまさに人類の英知の勝利といってよいでしょう。

しかしながら実は、このバンド理論は物質を理解する完全な理論ではありません。ここまでの説明では、バンド理論によりミクロな世界の基礎方程式が解け、もう物質の性質はほぼ理解できたかのように書きましたが、実はこの理論には一点、数学的に怪しいところがあります。電子にはマイナスの電荷があるため、電子同士にはお互い避けあおうとするクーロン反発力が働くのですが、バンド理論ではシュレディンガー方程式中のこの項の影響を無視してしまっているのです。この項は

ほとんどの物質で無視できるのですが（身の回りでありふれている物質ではほぼ無視出来ます。ごく僅かな例外が、後で述べる「鉄」です。）、このクーロン反発項が効いてくるときに、非常に興味深くまた応用上も重要な現象がおこるということがその後の研究でわかってきました。その代表的なものが「磁性」と「超伝導」です。

「磁性」を持つ物質の代表例は皆さん良く御存知の「鉄」です。古代から鉄が磁石にひきつけられる性質を持つことは良く知られてきていました。このことに関して、現在までに、電子1つ1つが小さな磁石のような性質を持っていて、この微小磁石が物質中で同じ向きに整列することで鉄において磁性が生じるということがわかってきています。しかしながら、どのような機構でこの微小磁石が整列するかということについては、先ほど述べたようにシュレディンガー方程式中のクーロン反発項が関与している問題であり、実はまだ現代物理学で完全には解明されていない問題なのです。「磁性」は身の回りにありふれていて、広く応用もされているのですが、実はこのように物理的に未解明な部分がたくさんとあったりします。

もう1つの例としてあげました「超伝導」というのは、とても特異な状態で、電気抵抗が完全に0になるという非常に不思議な状態です。電気抵抗が完全に0というのはものすごいことで、例えば超伝導体でリングを作ってやり、そこに電流を一度流せば、その後は何もしなくても永久的に電流が流れ続けるというような信じられないことがおこったりします。この超伝導状態においては、電子間の相互作用により電子が2つ1組のペアを組んでいて、そのペアが量子力学的な位相のそろった波として振る舞う、というようなことまでは現在まで解明されていますが、ペアを組む機構などまだまだわからないことがいっぱい残っています。今のところ超伝導はものすごく低い温度でしか起

こっていないのですが、この超伝導の機構が完全に解明されて室温でも超伝導になる物質が作製できたら、産業に大きな革命が起こることでしょう。

この「磁性」と「超伝導」のように、バンド理論を越えたところでは、非常に面白く、応用上も重要な性質が現れることが知られてきてはいますが、これらは現代の物理学ではまだ完全に理解されていないわけです。

私の最終的な目標は、これらのバンド理論を越えたところで起こる現象を解明し、物質中のシュレディンガー方程式の完全な解の性質を知りたいということです。もちろんこれは言うは易しですが、とんでもなく難しい問題で、なかなか頭で考えているだけで解決できる問題ではありません。そこで、実在するいろいろな磁性体や超伝導体を対象に、様々な実験をすることで、これらの物質中で電子がどのように振る舞っているかを明らかにしていくことで、上記の最終目標に向けて少しずつ進んでいこう、というのを当面の目標にして、研究を行っています。

(いとう てつあき)

同窓会事務局からのご挨拶と新歓合宿のご報告

総合人間学部 大学院人間・環境学研究科
同窓会 会長 安部 浩

人環・総人同窓会の会長を務めさせて頂いております安部と申します。皆様からは常日頃、当会に対する様々なご支援を頂戴しております。誠に有難うございます。本同窓会が平成十七年十二月に発足して以来、早二年半が過ぎました。このたび幸いにも、『総人広報』が当会の特集記事を掲載して下さる運びとなりました。道坂先生をはじめ、広報編集委員会関係各位の忝なきご高配に対しまして、ここに心より深謝申し上げます次第です。

御覧の通り、勝手ながらこの特集記事を二部構成にさせて頂きました。前半は、六月の総会においてご承認を賜りました同窓会事務局の新メンバー（諸般の事情によりまして全員ではありませんが）からのご挨拶、後半は、新入生を歓迎する行事として当会学生部が四月に主催しました合宿のご報告です。皆様におかれましては是非御一読の上、当会の活動にさらなるご理解をお示し下さいますれば幸甚に存じます。

同窓会事務局からのご挨拶

自己紹介と同窓会への誘い
副会長 戸田 剛文

今年度より、同窓会の副会長をおおせつかりました戸田剛文と申します。この同窓会を設立するときから、安部さんと松村さんと一緒にかかわっ

てまいりました。私たちもまるまる準備期間の一年十二期にわたって、同窓会の運営に携わることになりますので、組織というものの運営を考えるならば、今期はとくに、私たちの後を引き継いでくれる方を探して、次の役員にスムーズに業務が移行できるようにすることを目標としたいと思います。

簡単に私の自己紹介をさせていただきます。私は、京都大学に総合人間学部の一期生として入学してきました。その後、大学院人間・環境学研究科へと進学し、同研究科の助手を経て、現在准教授として在職しています。専門分野は、哲学で、安部さんと同じ分野で仕事をしています。あとは、この広報の別のページに自分の研究内容を紹介する文章を書いていますので、そちらをごらんください。

あと、同窓会での全体的な行事をご紹介します。同窓会の仕事の大きな柱は、年に一回の総会と三年に一度の名簿の発行です。総会は、財務の報告、役員的人事などを中心に、今後の同窓会のあり方を決定する場所です。また、今年度のように、学生部による企画を前後にくっつけることがあります。さらに、やはり楽しみなのは懇親会ですね。ただ、ひとつ残念なことは、総会に来てくださる人の数がとても少ないことです。確かに、私も、高校や中学の同窓会の総会とかには行ったこともありません。そういう意味では同窓会の総会というのはそういうものなのかもしれないのですが、ただ、この同窓会はまだまだ若く、卒業生の数も他の学部と比べると当然とても少ないので、ぜひ、来ていただいて今後一緒にもりたてていただきました

と思います。もうひとつの柱である名簿の発行ですが、これには私たちも大変頭を悩ませています。財政状況がとても苦しい同窓会ですので、みなさんご協力をお願いいたします。

同窓会のこれまでとこれから 幹事 松村圭一郎

私の総人・人環同窓会への関わりは、設立準備の時期をあわせて、3年あまりになります。その間、同窓会の幹事（会計担当）として、3回の総会と2回の同窓会フォーラム、そして名簿発行にたずさわってきました。

2005年12月の設立総会からの1年半は、名簿発行に向けた準備作業に費やされました。最初に紙の資料をひとつずつエクセルに打ち込んで整理していく作業では、同窓会学生部の皆さんの地道な努力に支えていただきました。

同窓会が設立されたことが卒業生に知られるようになると、その設立を喜び、期待を寄せてくれる多くの声に励まされました。なかには多額の寄付を申し出ていただいた卒業生の方もいて、事務局としても限られた時間と人手のなかでその期待に答えるべく知恵を絞ってきました。ニュースレターの発行は、コストをかけずに同窓会からの定期的な情報発信を可能にし、同窓会フォーラムの開催は、日ごろ出会うことのない卒業生を迎え、在校生や現・旧教員とともに総人や人環のあり方について議論を行う有意義な機会になっています。こうした活動も、同窓会学生部の積極的な関わりによって成り立っているものです。

2007年5月になんとか名簿発行にこぎつきましたが、名簿に掲載する情報を確認し、それを郵送する作業には、多大なコストがかかることを改めて認識しました。卒業生からの寄付がなければ、名簿発行という同窓会としてもっとも基本的な役割を果たすこともできませんでした。

同窓会からは、毎年、すべての会員の方に振込用紙や総会の案内を郵送する必要があります。現在、300名を超える会員の皆様に会費をお支払いいただいておりますが、会員数が3000名を超えるなか、こうした案内の発送費もおぼつかなくなっているのが現状です。これから同窓会として継続的な活動を続けていくためにも、会員の皆様には、今後とも会費の納入にご協力いただきますよう、お願いいたします。

同窓会に望むこと 幹事 小原 文明

新たに総人・人環同窓会の幹事となりました小原文明と申します。総人2期生、人環8期生に該当いたしまして、現在は人環で助教を務めております。人環や総人ができてから15年が経ち、これまでに多くの方々がこのキャンパスから巣立っていかれ、広い世界でご活躍のことと思います。しかし、私は総人入学以来このかた、吉田南キャンパスのみを生息範囲としておりまして、さすがにそろそろ行動範囲を広げなければと考えております。

さて、過日に開催されました同窓会のフォーラムや総会、懇親会では多くのOB・OGの方々にご参加いただき、皆さんと有意義な時間が過ごせたのではと思います。特に、在校生で組織される「同窓会学生部」の主導で行われたフォーラム『学生と語る総人・人環のいま』では、「総合人間学部」や「人間・環境学研究科」という実態の分かりづらい組織を所属先に選んだ、いうなれば少々変わった学生の葛藤や苦悩、挑戦や希望がストレートに伝わる内容であり、いかにも総人・人環的な企画であったと思います。ただ、現在の学生部には人環の院生が属していないためか、総人生の視点に偏ってしまっていたのが少々残念でありました。次の機会では、人環院生の視点からの企

画にも期待したいものです。そのためにも、「我こそは!」という人環院生の方々の学生部へのご参加を期待しております。

同窓会は、OB・OG間で旧交を温めるだけでなく、そのような方々と在校生との交流の場を提供することが第一の使命であると思います。とりわけ、総人や人環といった得体の知れない組織を巢立っていかれた開拓者精神に溢れるOB・OGの方々と交流は、現役在校生にとって素晴らしい刺激となりましょう。そのような場を多く持つために、私も微力ながらお手伝いをさせていただきますので、何卒宜しくお願い申し上げます。その前に、まずは私自身が刺激を受けて、世界を広げなければ…。

総人・人環同窓会の事務を始めて 事務 木下 晴世

この4月から『人環フォーラム』の編集と同窓会事務のお手伝いすることになりました。これまでは講座事務や専攻会計、図書館の閲覧業務などに携わってまいりました。同窓会の仕事は初めてで不安でしたが、引き続きまた同じ学部、同じ研究科のキャンパスで働くことができるようになって、うれしく思っています。

新しい職場は旧F号館（吉田南3号館）の414号室、窓の外にメディアセンターの東壁と吉田寮の手前の緑濃い銀杏の木がみえます。ノートパソコンとデスクトップが各一台、ファックスとコピー機を兼ねた複合機のプリンター、事務机と戸棚、二つのゼミ机と折りたたみの椅子が数客、ロッカーなどがあります。まず、掃除、それからマニュアル類を整理し、機器類の使い方を助教の松村先生に教えていただきながら、この部屋での仕事が始まりました。

最初の仕事は、卒業生への原稿依頼、自己紹介、総会の案内など含む同窓会のメーリングニュース

の発行でした。これもMLのアドレスの整理やメールを送る操作方法など教わりながら始めました。それから6月の第3回総会に向けて準備することになりました。

総会の当日は、顧問の竹市先生、前研究科長の富田先生と研究科長の堀先生にご出席いただき、在校生や卒業生も交えた和やかな歓談のうちに終わることができました。フォーラムを企画して下さった学生部の皆様のチームワークと総会直前の数日間の粘り強く目を瞑るような頑張りのおかげで、この企画は、「ドキュメンタリー上映、パネルディスカッションとよく構成され、総人関係者の実力を感じる」とのお言葉のある出席者の方から頂くことができました。学生らしく色鮮やかなポスターも掲示をお願いした先々で好評でした。役員の方をはじめ、学生部の皆様の準備や当日の受付を手伝い、また助けていただいて、不慣れな私もなんとか務めを終えられ、いまようやくほっとしている状態です。

来年は名簿発行の年に当たるので、それに備えて名簿のデータ調べや住所不明者の調査などにとりかかっています。その結果、とはいいいませんが、現在わかる範囲で同窓会の現状について申し上げてみたいと思います。

19年度の同窓会会員データによれば、旧教員、卒業生、在学生合わせた登録会員数は約3,500名、そのうちおよそ930名ほどが住所不明で連絡がとれない状態です。また会費の納入者数は340名ほどになっています。

おもにこの会費によって同窓会は運営・維持されているわけですが、会員データの保守と総会の案内ならびに会費請求書の印刷・発送などの外部業者への委託費、卒業時に配る学位記筒の購入費、振込手数料、名簿作成費の積立金だけで9割近くが費やされ、イベントの企画運営費や謝金はほとんど残らないのが現状です。会員との連絡や相互交流を密にしながら、安定した運営を続けるためには、会費収入の増加を図ることがまず必要とな

ります。

名簿はこのような同窓会の活動を支える重要な手段の一つであり、正確で充実した名簿作りは事務局の大切な仕事であると私は考えています。名簿あってこそその同窓会であり、それに支えられて、事務局のみならず会員相互の連絡も円滑に行われ、会の一層の発展も可能になるのではないのでしょうか。さらにまた、一人一人の会員と連絡をとりながらこの空白を埋めていくという地道な作業の中から同窓会の未来が作られていくような気もしています。

この仕事を始めてやっと3か月あまり、分からないこともあります。先生方や学生の方、事務局の方とご相談しながら、作業を進めてゆきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

新歓合宿のご報告

同窓会学生部 細川 由貴

本年4月19日と20日の2日間、るり溪少年自然の家で新入生歓迎合宿を開催しました。この企画は、3回生の有志が中心になって始めたものです。当日は新入生90人、上回生・院生27人が参加し、クラスや学年を越えた交流を深めることができました。

合宿当日には3つの企画を行いました。どれも新入生同士、また新入生と上回生の交流を深められるように、と考えたものです。

1. 先輩による体験談紹介

3人の個性的な先輩が、それぞれの総人での体験談を話しました。新入生に今後の総人生活を少しイメージしてもらうための企画です。体験談を紹介してくださったのは、次の3人の先輩がたです。

松村 実咲さん（国際文明学系3回生）

現在野食計画というグループの代表として活動しています。どうして野食計画に関わるようになったのか、野食計画でどのような活動をしているのか、などの話をさせていただきました。

東田 大志さん（人間・環境学研究科修士2回生）

現在の専攻であるパズル学や、パズル研究会を立ち上げたときのこと、最近の活動などを紹介させていただきました。

松村圭一郎先生（人間・環境学研究科助教）

総人時代にフィールドワーク研究会を立ち上げたこと、1年休学してエチオピアにフィールドワークに行ったことなどをお話いただきました。

2. レクリエーション

いくつかのグループに分かれて自由な時間を過ごしました。サッカー、ハイキング、部屋でのんびりする、などそれぞれに楽しく交流を深めました。

3. 交流会

合宿の醍醐味でもある夜には交流会を開きました。上回生が学系ごとに5つの部屋に分かれ、新入生が興味のある先輩に話を聞きに行きました。新入生にとっては授業や総人生活についてさまざまな話がきける良い機会になったようです。途中からは学系での部屋分けをなくしました。話が盛り上がったグループは一睡もしなかったところもあったそうです。

1泊2日という短い時間でしたが、事後アンケートの回答には「楽しかった」「今後の総人生活に役立つ話が聞けた」との声が多くあり、充実した時間を過ごせたことが伺えます。

なお詳細は、パンフレット「総合人間学部新入生歓迎合宿報告」をご覧ください（吉田南3号館・414教室の同窓会事務局にてお渡ししております）。

新任教員より

「自己紹介」をめぐって

鵜飼 大介（国際文明学系）



今年4月から、人間・環境学研究科現代文明論講座の助教として着任しました鵜飼大介です。

学外で人から自己紹介を求められたときに、言葉に詰まり、どうしても沈黙がはさまってしまうことがあります。「学部はどこですか」「人間・環境学研究科という大学院にあります」「それは何を研究しているところですか」「ええと、いろいろな分野の方が、ひとつの建物の中で研究してしまして…」そしてこの後、「学科」を聞かれることがあります。「学科というのはないのですが」云々と続けた後、「主に社会学をやっている研究室です」と付け加えてみます。いっこうに会話が弾みません。もっとも、こうした沈黙や当惑は、人環で研究されている方なら、だれしも経験したことがあることかもしれません。

直截に研究テーマを聞かれたときにも「…をやっています」というように、一言で簡潔に表すことができません。ひとまず「言語思想史」と答えることにしています。「聞いたことがありませんが、それはなんですか。言語学の歴史のようなものですか」「ええ。私の場合、とくに文字に注目しています。西欧における文字観や正書法に対する考え方、普遍書字運動や国語形成の歴史などを辿ることをしています。根本には、さまざまな角度から、文字というものに対する見方を炙り出

していきたい、というのがあるのです。」以下あれこれと続くのですが、すんなりとはいきません。

もともと自己紹介が不得手なうえに、制度的にも学問的にも、はっきりとした輪郭のない、同定しがたいものと関わっているため、困難に輪をかけているようです。当面、このつかみどころのなさ向き合いながら、模索していくほかありません。せめてディシプリンの不明確さを、肯定的なものに換えていきたい、と思っています。

以上のような未熟者ですが、ご指導ご鞭撻のほど、よろしく願い申し上げます。もしお会いしたときには、拙い「自己紹介」にお付き合いいただければ、幸いに存じます。

（うかい だいすけ）

新任の御挨拶

見平 典（国際文明学系）



2008年4月1日付けで、人間・環境学研究科共生文明学専攻現代文明論講座に講師（憲法学担当）として着任致しました、見平典と申します。総合人間学部では、国際文明学系に所属しております。京都大学法学部を卒業後、京都大学大学院法学研究科を経て、本研究科に参りました。

着任後4ヶ月になりますが、この間、専門教育や共通教育の中で、学生の方の鋭く正鵠を射た議論や質問に驚かされることが度々ありました。本学で教育を担当できることに喜びを感じるとともに、その責任の重み、大きさも深く感じております。

研究につきましては、私は、憲法秩序の形成の在り方について考察を進めております。日本国憲法によって立つ立憲民主主義は、公共的事項の決定について民主主義を採用しますが、他方で一定の自由や利益を、民主主義的な決定であっても侵してはならない「人権」として保障します。しかし、何がその「人権」にあたるのかは決して自明なものではなく、それも何らかの形で公共的に決定されなければなりません。それでは、そのような決定はどのようになされるべきでしょうか。このような問題意識のもと、私は、憲法秩序の形成の在り方、「人権」保障の在り方について、規範的分析と経験的分析の両方を進めております。

研究につきましては、私は、憲法秩序の形成の在り方について考察を進めております。日本国憲法によって立つ立憲民主主義は、公共的事項の決定について民主主義を採用しますが、他方で一定の自由や利益を、民主主義的な決定であっても侵してはならない「人権」として保障します。しかし、何がその「人権」にあたるのかは決して自明なものではなく、それも何らかの形で公共的に決定されなければなりません。それでは、そのような決定はどのようになされるべきでしょうか。このような問題意識のもと、私は、憲法秩序の形成の在り方、「人権」保障の在り方について、規範的分析と経験的分析の両方を進めております。

憲法学では規範的分析が中心の中、規範的分析のみならず経験的分析にも取り組んでおりますの

は、豊かな規範理論を構築するためには、現象の精確な理解が不可欠であるとの認識によるものです。これまでの日本の憲法学では、憲法現象の実証分析は、その必要性が指摘されつつも、本格的には取り組まれてきませんでした。私は、経験的分析と規範的分析の往復を通して、多様な人々が共生する現代社会に相応しい憲法秩序形成の在り方を構想していく作業に、微力ではありますが貢献することができればと考えております。

なお、このような課題は、法学、政治学、社会学などの社会諸科学が重なり合う領域でもあります。そのような研究に取り組んでいる者として、学際性を特色とする本研究科に着任できましたことは大変な喜びであり、今後、教育・研究に一層精進して参る所存です。

若輩故、未だ至らぬ点も多いことかと存じますが、何卒御指導、御鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

（みひら つかさ）

「自由の学風」の中で

小木曾 哲（自然科学系）



京大人環／総人への着任が決まった時、思い出したのは、二十数年前、教養部時代のこのキャンパスを自分がうろついていた頃のことだった。当時の思い出で印象的だったこと

をいくつか挙げてみる。

- 建物の中も外もビラと落書きだらけで、学問をする空間としてふさわしいとはとても思えなかった
- 新入生オリエンテーションでは、3回生の先輩が、『授業に出席すること』『内容を理解すること』『単位を取ること』、この3つは独立です』と説明していた
- 物理の講義では、先生が黒板に向かって小さな声でボソボソと話すだけなので、ほとんど聞き取ることができなかった
- 数学の講義では、微分積分学のはずなのに、最初の3ヶ月は整数論・集合論の話をやたらと聞かされた
- ヘルメット軍団による授業妨害が頻繁にあり、果敢に反論して追い出そうとする先生もいたが、さっさと逃げてしまう先生もいた
- 「学内で暴漢に襲われても警察に助けしてもらえない」と言われていた

そんな当時の雰囲気の中で、やがて私は、大学に入学した目的を見失い、「燃え尽き症候群」となって、授業にもクラブにもあまり参加しない、実に空虚な日々を、3回生になるまで過ごしてしまうことになった。

別に私は、自分が燃え尽き症候群に陥った責任

を、当時の先生方や環境に押し付ける気は全くない。空虚な数年間を過ごしてしまった最大の要因は私自身の中にあり、第一義的責任は私にある。しかし、だからといって、上に述べたような実態が、果たして「自由の学風」として誇るべきことだったのか？ 大学という高等教育の場として許容されることだったのか？ 私には大いに疑問である。

二十年ぶりにこのキャンパスに戻って来て、当時とはすっかり様変わりしているのに驚いた。建物は見違えるほど綺麗になった。授業妨害もない。教育の質向上のために様々な努力がなされているとも聞いている。では、教員と学生は変わったのだろうか。着任6ヶ月では、まだ判断がつかない。

「大学とは、何を学ぶべき所なのか？」それが分からず、教養部学生時代の私は途方に暮れていた。「大学とは、何を教えるべき所なのか？」明確な答えを出せぬまま着任の日を迎え、今も、暗中模索しながら授業の準備をする日々である。総合人間学部の教員として、自分が学生達に教え伝えられることは何なのか、答えが見つかる日が来るのかどうかさえわからない。しかし、少なくとも、授業の科目名から逸脱しない内容を教えることは守りたいと思う。また、「出席する」ことで「内容の理解」が深まるような授業をすることを目指したいと思う。そして、今ここにいる学生達が、「自由」の中で「空虚」に陥らずに過ごせるよう、私なりに力を尽くそうと思っている。

人間・環境学研究科 環境学専攻 自然環境動態論講座 准教授

専門は岩石学・地球化学＝マグマや岩石から地球内部の進化を探ることがテーマ

(こぎそ てつ)

新任のご挨拶

小西 隆士（自然科学系）



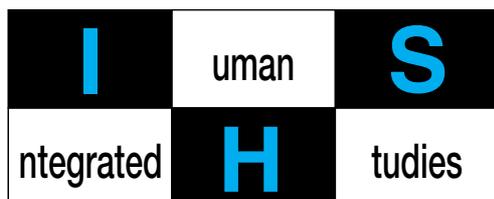
2008年4月1日に人間・環境学研究科関連環境学専攻（総合人間学部自然科学系）物質関連論講座の助教として着任いたしました小西隆士（ここにたかし）と申します。もともとは本学工学部工業化学科出身で、工学研究科高分子化学専攻で2006年3月に博士号を取得後、昨年度まで東京大学生産技術研究所で博士研究員をしておりました。学生時代は附置研である化学研究所（黄檗）の研究室に4回生から6年間在籍しており、博士研究員として在籍しておりました東大でも附置研の生産技術研究所で2年間在籍しておりました。附置研はキャンパスを歩く人の数も教養部のあるキャンパスに比べて少なく、学生でも院生以上の年齢の方々しか、キャンパスにいないので、今回着任したのは吉田キャンパスでは、キャンパス内を歩く人の多さと若さに戸惑っております。

学生時代は高分子の物性、主に高分子の結晶化機構について研究しておりました。これまで高分子の結晶化のモデルは、メルト状態から結晶核が形成されるモデルのみを考えてきましたが、高分子物質のような複雑系での結晶化過程においては中間状態の存在が重要であると考え、研究を行ってきました。そして、いくつかの高分子物質で、熔融状態から深い過冷却温度域に急冷させることにより、結晶が安定に存在する温度域よりも低い温度域で液晶的な構造が形成されることを明らか

にしました。このような実験結果から、高分子物質では結晶化を起こす際、液晶的な中間状態を取る可能性があることがわかりました。実際に、高分子物質では秩序化の過程において、その環境により最終的にとりえる構造が大きく異なることが知られておりますが、その原因については様々な要因が複雑に絡み合っているために、十分に理解されておられません。この液晶的な中間状態の研究が複雑な結晶化の理解へのひとつの手がかりになるのではないかと考えております。高分子物質はその名の通り分子量が大きく、低分子に比べ空間・時間スケールが大きいのが特徴です。このような性質を持つ物質はソフトマターと呼ばれ、外部刺激に対しての応答が大きく、秩序化過程や、非平衡過程に興味をもたれています。着任した研究室でも高分子材料を用いた非平衡現象についての実験的手法を用いた研究を行っております。これからは幅広く色々なことに興味を持って研究に取り組んでいきたいと思っております。

これから様々な形でお世話になるかと思いますが、精一杯がんばりますので、どうぞよろしくお願いたします。

（ここにたかし）



編集後記

総合人間学部広報 No.43 ができあがりしました。今回は9名の先生方に御執筆いただきました。諸先生には、お忙しいなか、ありがとうございました。また同窓会の活動と、4月に同窓会の主催で行われた新歓合宿についての紹介を、事務局より寄稿していただきました。

執筆下さった先生方の文章からも、本学部では文理さまざまな分野の研究が行われていることを理解していただけたのではないのでしょうか。またこのような学部の特色を同窓会の皆様が新生に紹介して下さったことは、詳細は紙面の都合で割愛いたしましたが、大変有意義だったと思います。

本誌も小さな情報誌ではありますが、「一斑を以て全豹をト」すものになれば、幸いです。

(A・M)

人間・環境学研究科
総合人間学部

広報委員会